

ある日のこと、ある子が逆さにひっくり返したイスを床の上に置き、車のように動かし始めました。「面白そう」と思った3人の子が真似してその後ろにつきました。保育室内のテーブルや人をうまくよけながら4人は連なってイスの車を動かしています。発想が面白く楽しそうに遊んでいるのですが、保育者としては床とイスのことが心配です。「面白いけど、イスが壊れそうだなあ」と声をかけました。「動かしたい」と言うので、ダンボール箱を使ってみることにしました。「中に乗りたいの」「電車にする」「足で歩いて動くようにしたい」と話します。「紐をつける？」となげかけると、「首にかけられるようにつきたい」「両脇に持ち手を付ける」「おへその前あたりに紐を一本通して持ち手をつくる」とイメージはそれぞれでした。ダンボール箱が電車として乗れる車体になると、さあ出発です。動きながら、「あっ、駅があるね」「ライトもつけよう」「運転レバーを作ろう」「路線地図もつけたほうがいい」と思いつき、一時停車してはつくり足す姿がみられました。

次の日「昨日の電車の続きをする」と言い、AちゃんとBちゃんがダンボール電車に乗って動き始めました。低いテーブルの下を通ろうとしています。「何をしようとしているのかな？」と声をかけると、「この電車は地下鉄なの」とつぶやきました。柵を使って通りやすいトンネルを作ると、再び出発です。黄色と黒の縞模様の棒を持ちながら「カンカンカンカン」と踏切役の子の声が響くと、保育室は一気に「電車が走る街」のようになりました。

その日の午後、保育室の前にラインカーで線路となる線を引き、電車が走る場所を園庭に移しました。Aちゃんは「ゆっくり電車です」と言いつつお客さんを乗せるとスピードをあげて走っています。Bちゃんは「すごい音を出して走るんだ」「地下鉄だからね」とつぶやきながら「ガタン、ゴトトン」と電車が走る音を表現しています。Cちゃんは「駅です」「まもなく出発します」と駅に着くたびに丁寧なアナウンスをしています。

線路の敷地内にある木製のキッチンで料理づくりをしていた子たちのごはん屋さんには、いつの間にか電車が停まる目的地の一つになっていました。保育者が乗っていた電車を降りて「何か食べるもの、ありますか？」とキッチンに立ち寄ると、「塩ご飯があります。でもすごく時間がかかります」とDちゃんが答えました。「わかりました。電車の時間に間に合うかなあ」とつぶやきながら待っていると、電車は「到着～」「出発します」と往來を繰り返しながら、保育者をちらりと見てクスクスッと笑い、次々通過していきます。「あ～、また電車、行っちゃった」と保育者がつぶやいてみても、DちゃんとEちゃんはニヤリとしながらマイペースでご飯づくりを続けています。

「電車が走る」という状況の中で、子ども同士特別な打ち合わせはありません。時折、周りをつぶやく言葉や相手がしていることを見て感じながら、それぞれの関わり方で電車ごっこに携わり、この遊びの世界観が出来上がっていることに驚きました。(教諭・阿部和香子)



大寒を迎えた在る寒い朝。登園してきたA児がいつもの様に砂場に飛び出して行った。山を作るつもりだったらいい。いつものシャベルを手を持って、いつもの様に砂を掘ろうとしたが、シャベルが砂に入らない。「あれ～？」とばかりに何度か同じ事を繰り返していたが、やはりシャベルはささらなかった。

「せんせ～い。山ができないんだよ～」と声を掛けてきた。一緒に掘って見たが、厚い氷を相手にしている様でシャベルが砂に入らなかった。「硬いね～。私も駄目だ～」。するとA児は暫く考えて、クラス迄行って大声で「ちょっと来て～。手伝ってよ」と呼びかけると、「なにに」と興味津々の子達が次々と集まって来た。山を作りたいけど出来ない事を話すと、其々がシャベルを持って砂を掘ってみる。「ここ掘ってみようよ」と、一緒に掘ったら出来るかもと思った子達もいて2～3人でチャレンジしてみたりしたが、やはり砂は硬くてびくともしなかった。

そんなこんなしているうちに、日が差してきた。幾らか温かくなったせいか、全くシャベルが入らなかった砂場で少しだけ先が入る様になった。そうなる子どもたちには俄然やる気が出てくる。「ここ手伝って」3～4人でシャベルを持って足で乗って「そ～れ」「そ～れ」と力を込める。すると僅かだがシャベルが入った。「上にして」の声で更にシャベルを持ち上げるとまるでかさぶたの大きいみたいな砂の塊がとれた。「でっかい」「こっちも硬いよ。取れるかも」「え～」と、あちこちで探索が開始される。少し探りにシャベルを入れてみて「ここ取れるかも」と、決めると仲間を集めて掘りだす。この大きな砂の塊探しが子ども達の探究心に火をつけたらしい。声を掛け合ってどんどん掘り進み砂場の表面の硬い所はほぼ全部発掘？した。

「せ～の。わっしょい、わっしょい」「わっしょい、わっしょい」。掛け声と、砂を持ち上げる動きとが重なり合っていく一体感が、見ている私にも感じられた。子ども達の声がどんどん大きくなっていき、持ち上がったと思ったら崩れてしまった塊を見て呟いていた。「壊れた～。折れた～」。でも、何だか満足そうな子ども達の顔にみえた。結局砂場の硬い所は、ほぼほじくり返した。「これ一番だな～」と皆で覗きこんだ砂の塊は、大人でも一人では持ち上げられない位の重さだった。子ども達のパワーが一気に結集された瞬間を見た朝だった。(教諭・高橋敬子)



誰も知らないタワーオブテラー

年少 つくし組



「先生、これ作りたい!」「これをやってみたい!」。そんな声が、2学期を経て、3学期になるとあちこちで聞こえてくるようになりました。もちろん、やってみたいことに4月から取り組んでいるのですが、保育室に置いてある道具や遊具ではなく、言うなれば「既存の枠」を飛び越える発想とも言える、そんな声があちこちから聞こえてくるようになります。

12月にディズニーランドに行った子が複数いたことから、ダンボやメリーゴーランドをつくりました。「乗れるやつだよ。それで空、飛ぶの!」と、空は飛べませんでしたが、子どもたちが乗れる大きさと強度にしてみました。

すると、12月末にTちゃんが「タワーオブテラー作りたい」とつぶやきます。「上にヒューって行って、ひゅーって落ちるの」と説明してくれます。調べると、ディズニーシーにある、フリーフォール型のアトラクションということが分かりました。

クラスのみんなにも聞いてみると、タワーオブテラーという乗り物にはいま一つピンときていないようでしたが、それもそのはず、慎重制限があり年少児の身長では乗れない物でした(Tちゃんはなぜそんなに詳しんだ?!)。けれども、「上にあがって、落ちる」という動きは印象に残っていたようです。「先生が、持ち上げて降ろすのは?」と言われますが、それはちょっと現実的ではありません。

そうこう悩んでいると、3学期になりました。始業式を経て2日後、Aちゃんに「先生、タワーオブテラー、つくらないの?」と言われました。発案したTちゃんではないAちゃんに指摘されたことに驚きました。Tちゃんだけの興味ではなく、みんなに話をしたことで、タワーオブテラーという未知のアトラクションがクラスの仲間の関心の的になったのです。

そこで、再度、担任も知恵を絞りつつ、同僚の教員とも相談して、いくつか遊び方のパターンを考え、子どもたちに提案しました。子どもたちが採用したのは、積み木で高さをつくり、ジャンプすることで「おちる」というアトラクションを再現するパターンでした。こうして、誰も乗ったことのない「未知」のタワーオブテラーが完成したのです。

経験していない遊びでも、友だちの声に想像力を働かせていったところに、これまでの仲間同士の繋がりや豊富な遊びの経験が、積み重なっているようで、嬉しくなりました。(教諭・西井宏之)



「一緒に」の芽生え

未就園 ぴよぴよ



「そといく?」「おやつ、まだ?」と、子どもから話すようになり、その時間を楽しみにする姿が見られるようになってきました。お母さんがお迎えに来て、まだ帰りたくない様子の子もいて、ぴよぴよでの生活が子どもたちにとって、安心して過ごせる場所になったのだと感じています。

同じクラスの友だちと顔を合わせていくなかで、ブロックを一緒につなげたり、座布団をお腹に乗せて一緒にお昼寝をしたりしています。「おもしろそう」「自分もやってみよう」と心が動き、「一緒に」があらわれてきて、友だちとの関わりをもち始めるようになってきました。

ある日、一緒に遊びたいけれど、恥ずかしくて相手に声をかけられないのか、座っている子に「きて」とやさしく手招きをしている子がいました。

自分だけだった世界が広がった瞬間でした。子どもたちは、様々な人がいるなかで言葉やしぐさを用い、やりとりをして、人との関わりを増やし豊かにしていきます。もちろん、上手いかない時もありますが、ぴよぴよの子どもたちは、保育者に支えられながら自分の思いを伝えたり、相手とやりとりしたりして、少しずつ自分の世界を広げてきています。

12月には、一人ひとりにマークが渡されました。それからは、みんなで集まる時には「〇〇マークの〇〇ちゃん♪」と名前を呼ばれるようになりました。友だちのマークも気になるようです。おやつの前にイスを運んだり、食べた後の食器を片付けたり、自分のできることも増えてきました。お天気のいい日にはお帰りの前に、外の砂場で遊んだりしています。

これからも心と体をたくさん動かして、いっぱい遊ぼうね。(主任・佐藤 恵)



梅の実会実行委員会の活動から

読み聞かせやこま回しなど、保護者や卒園生のパフォーマンスに、子どもたちは見入っていました。1月25日のふだんぎコンサートでは、有志やわらべうたサークルのみなさん、素敵なひとときをありがとうございます。

